

おお
大

とう
藤

おさむ
修

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文 第 97 号

学位授与年月日 平成6年10月6日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 近世農民と家・村・国家
——生活史・社会史の視座から——

論文審査委員 (主査)
教授 渡 邊 信 夫 教授 羽 下 徳 彦
教授 玉 懸 博 之

論文内容の要旨

1. 問題関心と視角

「家」の理念型を要約的に表現すれば、固有の「家名」「家産」「家業」をもち、先祖代々への崇拜の念とその祭祀を精神的支えとして、世代を超えて永続していくことを志向する組織体、と定義づけて大過ないであろう。では、こうした「家」の理念型およびそれにまつわる意識・観念が農民の間で広く形成されたのは何時頃で、どのような歴史的過程を経ていたのであろうか。そして、「家」は、農民たちが生産・生活を営む上でどのような意味をもつ存在であったのだろうか。それは、農民たちが何故、「家」なるものを形成し、それを守ろうとしてきたのか、という問題につながる。筆者の根源的な問題関心は、如上の点にある。

筆者が農民の「家」についての研究に着手した1970年代当時は、明治民法が規定した「家」制度は近世の武士層のそれをモデルにしたもので、一般庶民の生活慣行はそれとは無縁であり、先祖とか家名などによって支えられる「家」の観念も存在しなかったとする見解が、法社会学・法史学においても、歴史学においても支配的であった。しかしながら、第2次大戦後、国家法制としての「家」制度は廃止されたものの、農村においては「家」や「家」意識は根強く残っているが、それが単に明治以降の国家法制のもとでの産物にすぎないのならば、はたしてかくまでも「家」が農民

の間に深く根付き、それを守ることが至上の価値として生活上の規範にまで内面化するであろうか。それに、明治政府が法制化した「家」の原形的なものがそれ以前には庶民の間ではまったく形成されていなかったとしたら、そもそも「家」を国民統治・統合の法的装置として指定すること自体、政策的に無意味であったことになる。だが、国民統治・統合という国家の根幹にかかわる政策が、その現実的基盤を欠いたまま実施されたとみるのは、あまりにも非歴史的な見解であろう。およそ、政治権力が民衆を統治しようとするとき、民衆の間で形成されているシステムを踏まえつつ、それを再編して統治のシステムに転化させるのが常であり、最も効果的な方法である。

戦後しばらくの間、法社会学・法史学や歴史学においては、明治民法に規定された「家」制度を我が国古来の伝統的美風であるとして、その復活をはかる動向に反対する立場から、明治民法の「家」制度は決して一般庶民の伝統を引き継ぐものではないことがことさらに強調される傾向にあった。総じて、「家」に関する議論には、それをめぐる政治動向に対する論者の立場が色濃く反映しており、そもそも一般庶民にとって「家」とはいかなる意味をもつ存在であったかが学問的に十分には検討されてこなかったきらいがある。庶民の間で「家」が形成されてきた歴史的経緯と契機、そしてそれが生産・生活を営む上で果たしてきた役割を実証的に明らかにし、それを踏まえて支配システムとの関係を考察しなければ、明治政府が「家」を国民統治・統合の法的装置として指定したことの意味、およびそれが一般庶民に及ぼした歴史的規定性の本質に迫ることはできないだろう。

本研究は、以上のような問題関心と研究史批判に立ち、近世において理念型的な「家」の形成が農民一般に及んでゆき、個々の小経営農民が自己の「家」の超世代的永続を主体的に希求する「家」意識を持つに至る過程を村落構造との関連において具体的に明らかにしたうえで、「家」およびその存続を支える社会的基盤である「村」共同体や地域社会が農民にとってもった意味を、現世の生活のみならず死後の葬送・供養の問題をも視野に収めて、生活史・社会史の視座から多面的にアプローチを試みたものである。また、農民の側からみたとき、幕藩制国家とはいかなる存在であったか、逆に国家の側は、いかなる関心からどのような形で農民の生活および人生に関わったか、という問題も考えてみた。そして、明治に入って国家が法制化した「家」と近世以来の慣行としての農民の「家」との関係を、その連関制と対抗性の両面に着目して指摘し、近世の側から近代史に対して問題を投げかけてみた。

2. 構成と概要

第1部「総論 近世の国家・社会と家・氏・人生」は、筆者自身の個別実証研究および諸氏の関連研究を踏まえて、当該テーマについて筆者なりの観点から総論的に論述し、今後の検討課題も提示したものである。

第1章「幕藩制国家と家・社会」では、幕藩制国家の身分制度と家制度を基軸とした社会編成の特質について指摘したうえで、武士と農民の家を取り上げ、それをとりまく社会的諸関係を踏まえて、それぞれの家の存在形態、その中での家族のあり方と家内の秩序、および日常の生活規範、人

生観などについて考察した。そして最後に、近世の「家」と明治以降の国家法制およびイデオロギー上の「家」の連関性と差異性、国家権力が「家」に求めた役割と農民にとっての「家」の意味との関係などについて述べ、日本の「近代」と「家」に関しての若干の見通しを近世の側から示してみた。

近世における農民の家は当主夫婦とその直系親を主体とした小家族から構成されるのが一般的で、そうした小農民の家が土地所持と農業経営の主体となり（つまり、自らの家産・家業を確立し）、さらに自己の家の先祖を主体的に祭り、当主の名前の継承（「家名」相続）によって家の個別性と超世代的連続性を社会的に表示するようになる。そして、「家名」「家産」「家業」および先祖祭祀権を一体として一子に単独継承・相続させる慣行が、広く農民の間に形成されるところとなった。誰に家を相続させるかは地域や階層によって差異があるが、長男子に相続させるのが一般的である。個々の小農民も経営的・社会的に自立性を強めるに伴い、自己の家の先祖を独自に祭り、主体的な「家」意識を持つようになったことは、自己という存在を先祖から子孫へという時間的流れの中に位置付け、家を守り発展させていくべき責任主体としての自覚を持つ契機となる。また、「家名」「家産」「家業」を単独相続し、「家」の権威を体現することになった当主の地位・権限も強まり、一般の小農民の家にあっても当主を中心とした家内秩序が形成されるところとなったと思われる。小農民の自立化を契機とした理念型的な「家」の広汎な形成は、小農民を主体とする村の共同体的秩序の形成と軌を一にするものであり、個々の家の存続は村や親類の共同機能に支えられると同時に、家内部の人間関係および婚姻、養子縁組、相続、「家産」の管理・処分など家の重要問題については村や親類の干渉を受けた。

明治政府は明治4年に戸籍法を制定して、「家」を国民統治の装置として戸籍上に確定し、それぞれの「家」の戸主を通じて家族を把握・統制しようとした。そして、紆余曲折を経て、明治31年公布・施行の民法によって戸主権と長男子単独相続制を骨子とする「家」制度の体系化を完成させた。また、民衆の生活意識の核心をなす「家」意識に着目し、それを支える先祖崇拜を利用して、「家」の先祖→村氏神→伊勢大神というふうに連結する「敬神崇祖」の体系への組織化をはかり、国民をイデオロギー的に統合しようとした。明治政府は、近世を通じて民衆の間にも広く形成されていた「家」を踏まえつつ、それを改編して、国民統治・統合の媒介装置として機能させようとしたのであるが、「家」は統治・統合の装置として機能し得る性格と同時に、抵抗の拠り所ともなる性格をも有している。政府は一方で「家」制度の再編・補強によって国民統治と統合をはかりながら、他方で近代化を進める諸政策を強行した。両者の間には幾多の矛盾が存在しており、それは農民の「家」崩壊の危機を不断に醸成し、農民をして「家」を守るために国家権力に立ち向かわしめる危険性ははらんでいた。それ故、天皇制国家は、警察・憲兵組織による暴力的弾圧体制とそれに支えられた地主支配体制の強化、そして絶え間ない教化および種々のイデオロギー戦略を遂行していかねばならなかったのである。

また、近代の国家法制上の「家」と「家」国家論にあっては、「家」の論理に本来的に内在して

いた家長の責任をめぐる重要な契機が欠落せしめられていた点も見落としてはならない。近年の近代史の研究では、国家を一つの「家」に見立てる国体論の歴史的原型を、近世の藩が大名を家長とする「家」に擬制されていた国制に求められている。しかしながら、近世の藩＝「家」にあっては、大名はその家長として御家の安泰に最高責任を負っており、もしその安泰を危うくするような所行があれば、家中の者たちの実力行使で以て強制的に家長の地位から退けられた。ところが、近代の天皇制国家にあっては、天皇は「家」の家長に見立てられたにもかかわらず、明治憲法第3条の「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」という規定により、その政治的行為に関する一切の問責を免れたのである。

近世の庶民の「家」にあっても、当主が一家の長としてふさわしくないと家の者および村人や親類などに判断されたならば、強制的にその地位から退けられた。だが、近代においては、近世の村・町の請負的統治ではなく、それぞれの「家」の戸主を国民統治の末端機関として体系的に定置していたので、家の者および地縁共同体や親類などが自律的に戸主を退けたのでは統治が不安定になる。したがって、「家」の戸主の地位と権限は国家の法制によって保証されたのである。

近世の藩＝「家」および庶民の「家」における「忠」「孝」は、時の主君・家長個人に対する絶対服従ではなく、主君・家長が「家」の存続を危うくする場合には、実力行使をしてもその地位から追放して「家」を守ることが、代々の主君・家長＝先祖への「忠」「孝」であるとされていた。それに対し、近代天皇制国家における国民道徳とされた「忠」「孝」は、天皇・家長個人への絶対服従を強要するものであり、「家」本来の規範からは明らかに変質せしめられていた。近代の「家」制度と「家」国家論については家父長制的と性格規定してもよいであろうが、しかしそれは変質せしめられた「家」であって、本来の「家」は家父長制的概念では律しきれない論理と契機を内在させていたことを看過してはならないのである。従来の研究ではまさにその点が見落とされており、ために近代天皇制国家の本質に迫りえていない。

第2章「近世農民のライフサイクルと家・村・国家」は、第1章第2節「農民の家と村社会」と一連のものとして草した。近世の家と村に生きた男女それぞれの描いた基本的なライフサイクルの軌跡はどのようなものであったか。そしてそれは、どのような人生観に支えられていたのか。また、家、村、およびこの時代の国家公権を担っていた幕藩領主は、個々人の人生にいかなる関心からどのような形で関与していたのか。本章では、以上の点を基軸にすえ、それとかがわる諸問題をも視野に収めつつ、歴史学と隣接諸科学の分野における関連研究を参照して総論的に叙述してみた。これは、ライフサイクル論を基軸とした近世農民生活史の構想の試みである。ライフサイクル全体を観察対象とすれば、近年歴史学においても光が当てられつつある女性や子供・老人・病人・障害者などの問題も、すべて射程に収め、総合的・統一的に考察することができるのである。その際、近世の人々のライフサイクル観は現世と来世を一貫して成り立っていたと思われるので、現世の人生のみならず、死後の問題をも対象に含めた。また、正規の人生コースからはずれることがどういう意味をもっていたのかという点にも、意を払った。

第3章「近世の国家・社会と苗字・姓氏」は、古代律令制下で成立した姓氏と中世に生まれた苗字が近世においてどのような展開を示し、いかなる政治的・社会的機能を果たしていたかを、近世の国制と社会の特質との関連で述べたものである。そのうち他家に嫁いだ女性の姓（氏）の問題については、これまで若干の言及はあるものの近世史家の間ではほとんど顧みられず、近年盛んになった近世女性史研究にあってもまったく取り上げられていないので、筆者の見出した史料を少しく提示し、問題の所在を指摘しておいた。そして、明治31年（1898）施行の明治民法で入婚女性も夫と同じ氏の系列に属し、同じ苗字を称することが規定されたことの意味を、日本の「氏」と「家」の歴史の上に位置づけて考えてみた。

古代律令制下で成立した姓は中国の姓制度を継受したものであり、父から子へと父系で継承されるのが原則であった。この姓を与える主体は天皇であり、賜与主体である天皇自身は姓を持たなかった。中世には、武家や農民の上層では、家を表示する家名として本宅所在地の地名にちなんだ苗字（名字）を創出した。ただ、この苗字も多くは父子相承され、父系血統を示す標識＝姓と同じ性格をも帯びようになっていった。この場合、家督相続者によって代々継承されていく苗字が家名としての社会的機能を果たしたのである。中世と近世においては苗字は家名と姓の両者の性格を備えていたものであり、苗字の成立をもって姓から家名へと単線的にとらえをとらえることはできない。

武家領主たちは苗字としての姓の他に、自らの系譜を由緒づけ、源平藤橘などの天皇の賜姓に由来する姓を本姓として名乗っていた。それは氏素姓によって尊卑が決まるという種姓観念の反映であるが、古代律令制下の官位制度の残存とも密接にかかわっていた。古代律令制国家の衰退によって官位制度はその実を失ったとはいえ、人々の社会的prestigeを公的に表示する標識として、その後も存続しつづけたが、この官位を天皇から賜与されるためには朝臣としての由緒を有する特定の尊貴な姓を持っていることが前提条件になっていたのである。近世幕府制下の武士は、將軍を頂点として知行恩給を媒介にピラミッド型の主従関係に編成されていた一方で、將軍以下諸大名と上級の旗本は天皇から官位を授与され、朝臣となっていた。その場合、將軍との君臣関係は中世において武士自らが創出した苗字で、他方、天皇との君臣関係は古代天皇制国家のもとで朝臣であった由緒をもつ姓で結んでいた。

近世の身分制度下では苗字の使用は武士の特権とされ、庶民が苗字を公に名乗ることは禁じられていた。それを前提にして、村・町の役人の職務に精励した者、献金その他の奇特の行為をした者、徒党・強訴の企てを密告した者、孝子などに褒賞として特に苗字を免許し、体制維持に利用した。国家的レベルでは苗字免許の権は幕藩領主の「公儀」（公権）としての権能の一つであったが、共同体内部においては独自の身分・権力関係が存在し、共同体の内部世界で私的にしる苗字を名乗る権利を免許する権限を握っていたのは共同体の支配者であった。また、共同体の支配層が自らの系譜を源平藤橘などの尊貴な氏に結びつけ、それを本姓として名乗って権威づけを行っていた例は普遍的にみられる。

ところで、他家に嫁入りした女性は、夫の父との間に養親子関係は設定されない、つまり血縁に

擬制されないが故に、死後婚家の先祖の系列に入りながらも、氏の方は実家の父方の系列を引きずり続けることとなった。明治政府も当初は、明治9年の太政官指令によって、他家に嫁した婦女は夫の家を相続した場合以外は所生の氏を称することを戸籍上の原則としていた。明治31年公布・施行の明治民法にいたって、日本の歴史上初めて、入嫁女性も夫と同じ氏の系列に属し、同じ苗字を称することが法的に確定された。これは、中国の姓制度を継受した「氏」と日本的な「家」との原理上の矛盾を、前者を後者の原理に合わせることによって解決したものであると、歴史的に位置づけることができよう。ここに初めて「家」的な氏制度が創出され、氏の系列と家筋（先祖祭祀）の系列とは一致させられて、苗字は家名として一元化し、従前のような個人の父系血統を表示する標識としての側面は払拭されたのである。

第2部「近世農民と家・村落」に、個別のテーマについて少しく実証的に検討した論稿を収めている。

第1章「近世における農民層の『家』意識の一般的成立と相続」は、近世の農民の間には「家」意識は一般的には存在しなかったのか、それとも一部の上層農民のみならず広範な階層においても「家」意識が広く存在していたのか、もしそうならば、何時頃、いかなる歴史的過程を経て成立したのか、そしてそれはいかなる内実を備えていたのか、という問題関心から草したものである。史料として用いたのは出羽国村山郡（現、山形県）の村々の宗門人別帳で、当主の交替に伴い父祖名を「家名」として代々襲名して家の超世代的永続性と個別性を社会的に表示する慣行の成立を指標にとり、農民層において「家」意識が一般的に成立してくる過程を村落構造との関連において考察した。また、家が世代を超えて永続していくことを主体的に希求する「家」意識を精神的に支えるのは、先祖に対する崇拝の念とその祭祀であるので、墓碑調査も行い、個々の家が墓碑を建立して主体的に死者・先祖の供養祭祀をするようになる時期の確定も併せて試みている。こうした方法によって近世農民層における「家」意識の一般的成立を確認したうえで、「家」の超世代的永続を実現していく行為である相続の具体的分析を通じて、「家」の特質にアプローチしてみた。

第2章「近世農民層の葬祭・先祖祭祀と家・親族・村落」は、近世農民層の葬送・法事および先祖祭祀のあり方と、その際の家、同族、親族、村落住民の関与の仕方と役割、そして先祖観と系譜観の特質などについて、民族学、宗教学、社会学、人類学などの分野での研究成果を踏まえ、若干の史料も検討して論じてみたものである。また、死後、「先祖」に昇華していくコースと「無縁仏」として扱われるコースとに分岐していることと、直系家族制の貫くようになった農民の家の構造上の特質との関係、小農民層における先祖崇拝の成熟と社会的差別の問題、婚出女性の死後祭祀のあり方と氏の系列の問題などについても考えてみた。近年、近世農民の生活史についても優れた研究成果があげられるようになったが、それらはもっぱら現世における生活を対象としたもので、死後の問題については近世史家はほとんど関心を向けてこなかった。だが、近世農民の人生観は死後の世界も含めて成り立っており、それをも歴史学の対象にしていかなければトータルな生活史は描けないし、現世における人生現象、例えば結婚、離婚、再婚などにしても死後の靈魂の処遇のされ方

と密接に関係していたはずなので、死後の問題をも視野に入れないとその意味を真に理解しえないであろう。また共同体論の立場からも、葬送と靈魂の供養に共同体がどのようにかかわっていたかは重要な問題であると考ええる。なぜなら、共同体は、成員の生存を保障するのみならず、死後の靈魂の安穩を保障する機能をも果たしていたはずだからである。しかしながら、従来の歴史学における共同体論は、現実には生きている者の生活保障のシステム、およびそれと支配システムとの関係にもっぱら意を払い、死後の保障の問題を欠落させてきた。本稿は、以上のような研究状況に対する批判と関心に立って、問題提起を目的に草したものである。

第3章「近世後期の親子間紛争と村落社会」は、駿河国駿東郡山之尻村（現、静岡県御殿場市山の尻）の名主を代々勤めていた家に伝わる近世後期の日記の記事から、親子間の紛争に関するものを取り上げ、それが発生した原因と社会的背景、村落社会におけるその解決の方法とその際の論理などを分析し、それを通じて、幕藩制下の家と村という枠組みの中での親子関係の特質、および個人と家と村の三者の関係の一端に迫ろうとしたものである。そして、幕藩制国家の法制における親子関係の規定とその間の紛争への対処の論理と、村落社会でのかかる紛争に対する近隣・5人組・村役人などの介入・仲裁の論理との対比も行った。本稿は、個人に視点をすえた村落生活史・社会史研究の具体的試みでもある。

第4章「地域とコミュニケーション」では、地域史研究の新たな視点としてコミュニケーション論を提起し、出羽国村山郡谷地郷（現、山形県西村山郡河北町）を対象に、その視点からする具体的考察を試みた。そこでは、地域社会におけるコミュニケーションの展開の両者を併せて考察し、それが家と地域を場とする生産・生活を守り発展させていくうえでもっていた意義、および近代国民国家形成のコミュニケーション面での基礎条件の幕藩制下における形成度とその特質、を検討することを課題としている。

第3部「家・村の復興と報徳運動」では、崩壊の危機に瀕した家と村を建て直すために、天保期以降関東およびその周辺地域に広まっていった報徳運動を取り上げる。そこでは、農民の立場から二宮尊徳が提起した「興（富）国安民」の理念に着目し、その生成と展開を分析基軸にすえている。

第1章「関東農村の荒廃と尊徳仕法」は、近世後期の農村荒廃が農民の内面にどのようなインパクトを与え、荒廃を克服して家と村を立て直すためにどのような思想や方法論を創造し、復興運動を展開したかを、二宮尊徳の思想形成と、それにもとづいて編み出し実践した報徳仕法を例にとって検討したものである。そこでは、領主階級の農村荒廃観と農民教化の論理、および農村荒廃の状況下での農民の思想形成と農事改良の特質、報徳運動に先立って展開した心学運動などと対比させて、尊徳の思想と仕法の性格を究明し、仕法の実態を谷田部落仕法を事例に具体的に分析している。仕法の分析に際してポイントとしたのは、尊徳が農民の立場から「興（富）国安民」を実現するための方途として編み出した報徳仕法が、現実の政治過程に組み込まれて実践に移されたとき、尊徳の立場と論理は領主階級のそれとどのような矛盾・対立を生じざるをえなかったか、という点であり、そこに主眼を置いて仕法の推移を追求している。なお、付論として、第2次大戦後の歴史学に

において尊徳の思想や仕法がどのような問題関心のもとに取り上げられ、どういった評価を与えられていたかを概観し、批判を加えた「戦後歴史学における尊徳研究の動向」を収めた。

第2章「『富国強兵』と『富国安民』」では、明治期の報徳社運動の指導者であった遠江国報徳社社長岡田良一郎の明治元年（1968）より同8年（1975）までの言論活動を分析して、維新・文明開化を遠州の一豪農であった彼がどのように認識し、新たな歴史的条件のもとで地域社会のリーダーとしての立場から、報徳主義の「富国安民」の理念をどのようにして実現したかを、国家の「富国強兵」の論理との関係において考究している。

報徳主義というと、第2次大戦前、勤儉自助努力、相互扶助の精神として国家によって大々的に宣伝されたせいか、いまだにそうした報徳主義理解を前提にして、二宮尊徳や報徳運動の性格が論じられる傾向が強い。そこでは、報徳主義が本来、国家の「安民」に対する責任こそを強く求めている点を見落とし、日露大戦後の地方改良運動を精神的に支えるイデオロギーとして国家主義的に変質せしめられた報徳主義を、尊徳以来のものとする理解に立って論が展開されている。そのため、報徳運動自体の内在論理と、国家がどのような側面において報徳主義を自らの論理に取り込もうとしたのかの関係が不分明である。

そうした研究史批判に立って、筆者は、幕藩制解体—近代化過程における報徳運動の生成・展開を、その内在論理の中核をなす「富国安民」の理念に着目して分析することを思い立った。本テーマについての研究はいまだ途上にあり、今後、尊徳仕法の事例分析を積み重ねるとともに、明治期を通じての岡田良一郎の思想展開と彼の指導した報徳社運動の実態について、日本の近代化過程におけるさまざまな問題との関係において考究していきたいと思っている。

論文審査結果の要旨

本論文は、序文、3部全9章から構成される。

「序文」では、明治民法は近世の武士層の「家」をモデルに規定し、法社会学等の諸学問も「家」を同様に理解し、本論文が主に対象とする一般庶民の「家」の形成は学問的に研究されてこなかったと述べる。そして、庶民の生活慣行、家名、祖先祭祀等を視野に入れ、近世農民の「家」形成を研究する必要があると本論文の課題を設定する。

第1部「第1章 幕藩制国家と家・社会」は、幕藩制国家の身分制度と家制度を基軸とした社会的編成の特質を指摘し、武士と農民の家の存在形態、家内秩序などを考察し、近世の「家」と明治以降の「家」の連関性と差異性を論じ、「家」は本来家父長制的概念だけでは律しきれないものと指摘する。

「第2章 近世農民のライフサイクルと家・村・国家」は、幕藩領主の個々人の人生への関与をも視野に、「家」を考察するに必要な近世農民生活史の問題点を指摘する。さらに論者は、近世の

のライフサイクル観は現世と来世を一貫して成り立っていたとし、「家」を考えるには死後の問題をも対象にする必要があると論じている。

「第3章 近世の国家・社会と苗字・姓氏」は、古代に成立した姓氏と中世に生まれた苗字の近世における展開を主に論じ、近世では苗字使用が武士の特権で、庶民の苗字使用はとくに免許された者に限るとされるが、村の支配者層は私的にしろ苗字を名乗ることが一般的であること、他家に嫁いだ女性は別姓で明治民法で同姓となったことを多数の事例を通して明らかにし、中国の姓制度に倣う「氏」と日本的「家」の原理上の矛盾がここで前者を後者の原理にあわせ解決されたと指摘する。

第2部「第1章 近世における農民層の『家』意識の一般的成立と相続」は、出羽国村山郡に事例を求め、農民層において家名の襲名慣行、先祖の供養祭祀、相続が一般化する過程を実証的に明らかにし、「家」意識の成立を論ずる。

「第2章 近世農民層の葬祭・先祖祭祀と家・親族・村落」は、「家」は、現世のみでなく死後の世界をも視野に入れた生活の視点から考察する必要があると説き、近世農民の葬送・法事および先祖祭祀の在り方と家、村落の関与の仕方と役割、そこに見る先祖観、系譜観の特質などを論じている。

「第3章 近世後期の親子間紛争と村落社会」は、駿河国駿東郡の名主日記を史料に、親子紛争に関し、幕藩法制の親子関係に基準をおく論理と、「家」の存続に重点をおこうとする村落側の論理を究明する。

「第4章 地域とコミュニケーション」は、出羽国谷地郷を事例に、地域社会におけるコミュニケーションの形態と展開を考察し、それが家と地域社会の生産・生活の維持発展にもつ意義を論じ、あわせて近代国民国家形成に向けての意味を検討する。

第3部「第1章 関東農村の荒廃と尊徳仕法」は、近世後期に崩壊の危機に瀕した家と村の復興運動として、二宮尊徳の創造した富国安民の理念がどのように形成され具体的にどう展開したか関東谷田部落仕法を事例に検討する。領主階級の農村荒廃観、農民教化の論理、農民の思想形成等に留意しつつ、報徳仕法の実践過程とその成果を詳細に追求する。

「第2章 『富国強兵』と『富国安民』」は、明治期の報徳社運動の指導者岡田良一郎の言論活動を分析し、報徳主義の「富国安民」の理念をどう実現しようとしたか、それを国の「富国強兵」の論理との関係において論ずる。そして、報徳主義を勤勉自助努力、相互扶助の精神と強調される傾向があるが、本来それは国家の「安民」に対する責任を強く求めるものであると説く。

以上、本論文は、日本社会の特質である「家」の歴史的な性格、特に近世から近代を視野に農民の「家」の形成とその存在形態を村落・国家との関わりで実証的かつ多角的に研究したものである。その成果は、多くの事例研究を通して通説を改め、研究史の空白を埋め、「家」の史的展開にあらたな体系を拓いたものと高く評価できる。その論述は実証的で十分に説得的であり、斯学の発展に寄与するところ大である。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。